

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 4 月 14 日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14244

研究課題名（和文）児童期トラウマがもたらす心理的影響メカニズムの解明

研究課題名（英文）Examination of Psychological Impacts of Childhood Trauma

研究代表者

中島 実穂（Nakajima, Miho）

明治学院大学・心理学部・研究員

研究者番号：40847753

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の目的は、被害者が成人してからの児童期トラウマによる影響メカニズムを、複数の心理学的理論に則って検討することであった。具体的には、大きく3つの研究を行った。第1に、世界的にメジャーな児童期トラウマの測定尺度であるChildhood Trauma Questionnaireの、日本人サンプルにおける信頼性・妥当性を検討した（CTQ-JNIMH）。第2に、素因ストレスモデルに則った検証を行った。第3に、ソーシャルサポート理論と児童期トラウマの世代間伝達に着目した検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

児童期トラウマとは、虐待やネグレクトなど、18歳未満でのトラウマ的経験である。児童期トラウマによる影響は長期的なものであり、被害者の子ども時代だけでなく、成人してからも様々な困難を誘引するリスクとなり得ることが示唆されてきた。そこで本研究では、成人期における児童期トラウマによる影響について、複数の心理学的理論を基にした調査を行い、当事者の生きづらさを解消するために必要な支援について考察した。

研究成果の概要（英文）：The objective of this research was to investigate the mechanism of the impact of childhood trauma in adulthood. The research was designed based on multiple psychological theories. Specifically, three main studies were conducted. Firstly, I examined the reliability and validity of the Childhood Trauma Questionnaire (CTQ-JNIMH) in a Japanese sample, which is a globally recognized measurement scale for childhood trauma. Secondly, I conducted a study based on the hypothesis derived from the diathesis-stress model. Thirdly, I conducted an investigation focusing on the intergenerational transmission of childhood trauma, considering the Social Support Theory.

研究分野：異常心理学

キーワード：児童期トラウマ 素因ストレスモデル ソーシャルサポート理論 デイリーハッスル 世代間伝達

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

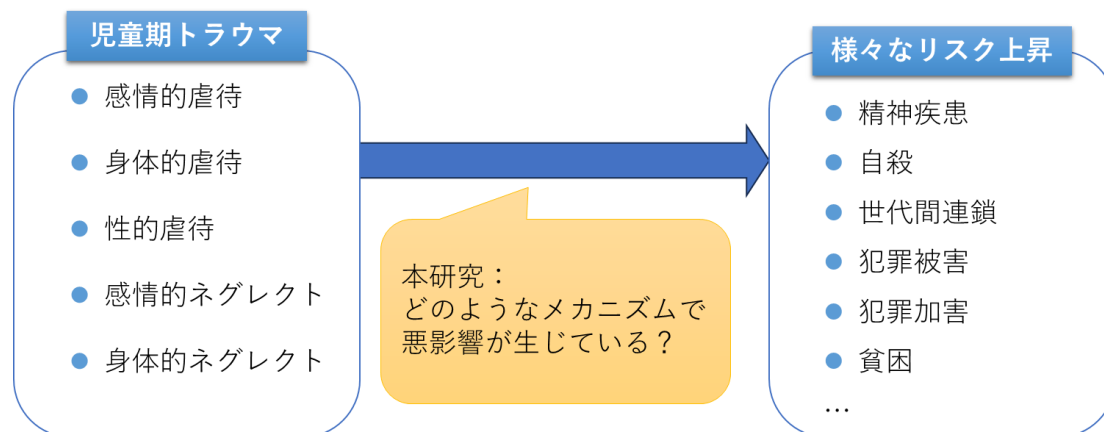
1. 研究開始当初の背景

児童期トラウマとは、虐待やネグレクトなど18歳未満で直面するトラウマ的経験であり、感情的虐待、身体的虐待、性的虐待、感情的ネグレクト、身体的ネグレクトの5つのタイプに分類される。児童期トラウマは、精神障害や自殺のリスクを高めるなど、生涯に渡って多大な影響を及ぼす。自然災害の頻発や情勢不安による影響の増大を背景に、児童期トラウマによる心のケアは、世界的にニーズが高まっている。効果的な心のケアを世界に普及するためには、児童期トラウマがもたらす心理的影響メカニズムを解明する必要がある。しかしながら先行研究では、児童期トラウマがもたらす結果 (i.e. 精神障害・自殺率の上昇) については調べられているものの、それがどのような心理的・発達のメカニズムで生じているのかについては不明な点も多く、研究が不足していた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、成人後の児童期トラウマによる影響メカニズムについて、心理学的理論に基づき検討することであった (Figure 1)。研究1では、まず世界的にメジャーな児童期トラウマを測る尺度である Childhood Trauma Questionnaire の信頼性・妥当性を、日本人成人を対象として検討した。研究2では素因ストレスモデルに着目し、児童期トラウマがデイリーハッスルの悪影響を強める脆弱性要因となっているかを検討した。研究3では、ソーシャルサポート理論と児童期トラウマの世代間伝達に着目した。児童期トラウマにおける大きな問題の1つとして、児童期トラウマの被害者は育児に関する問題を抱えやすく、自分の子どもに対して虐待やネグレクトを行ってしまうリスクが高いということがある (世代間伝達)。一般的には、虐待やネグレクトの防止にはソーシャルサポートによるアプローチが有効であると考えられている。しかしながら児童期トラウマ被害者の場合は、育児における問題やメンタルヘルスの改善に、友人や家族といった身近な人からのソーシャルサポートがあまり有効に機能しない可能性が示唆されていた。よって当該研究では、未就学児の母親を対象とした調査を行い、ソーシャルサポートの効果やその背景に関する検討を行った。

Figure 1.
本研究の目的



3. 研究の方法

研究1および研究2では、選択式アンケート調査を実施し、量的な検討を行った。研究3では、選択式アンケートと自由記述式アンケートを実施し、量的検討と質的検討の両方を行った。

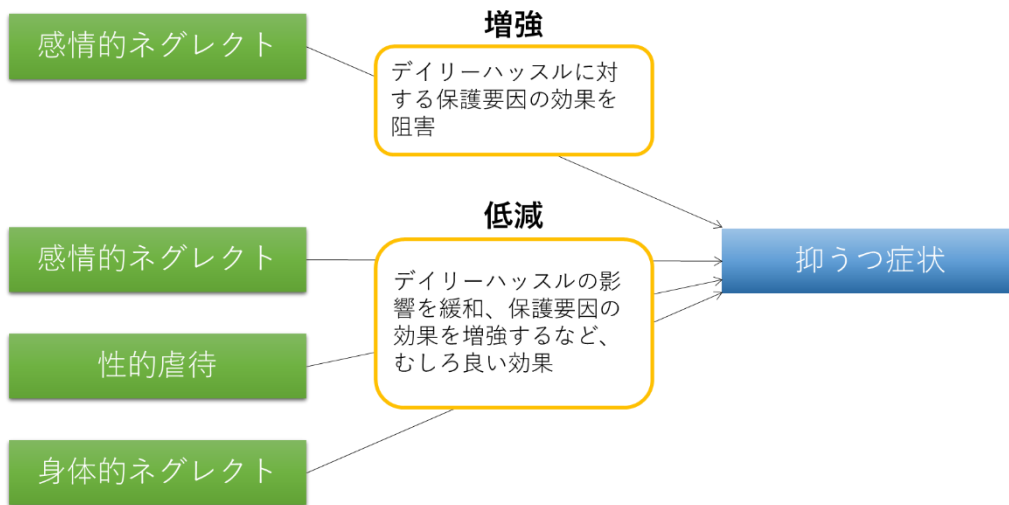
4. 研究成果

研究1において日本人成人の Childhood Trauma Questionnaire の信頼性・妥当性を検討した結果、身体的ネグレクト以外の4つの下位尺度では信頼性・妥当性に関する指標が基準値を上回った。よって当該尺度は、日本人成人においても概ね妥当に使用可能であることが確認された。

研究2において児童期トラウマとデイリーハッスルの関連を検討した結果、児童期トラウマによる効果は、タイプごとに異なることが示唆された (Figure 2)。まず感情的ネグレクトは、当初の仮説通り、デイリーハッスルによる悪影響を強め、抑うつ症状を増強することが示された。一方、性的虐待、身体的ネグレクト、感情的虐待においては、むしろ抑うつ症状の改善に寄与するという仮説と相反する効果が示された。この効果は、トラウマティックな経験を乗り越えることで適応力が上がるという心的外傷後成長の一種であると考察された。児童期トラウマ研究においては、そのタイプによる固有の効果についてはまだあまり検討されておらず、なぜこのような違いが見られたのかの理由は不明である。よってこの結果の背景メカニズムについては、今後

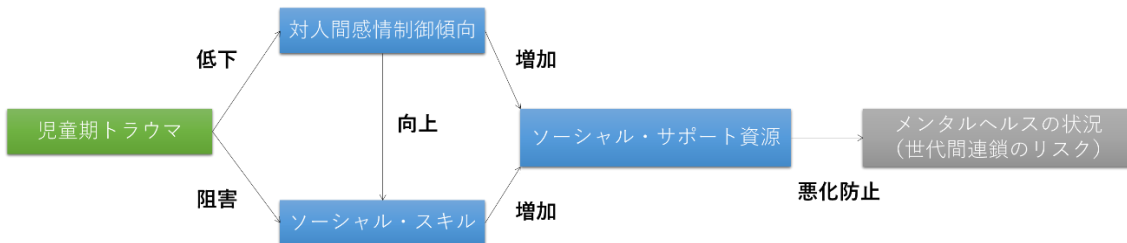
さらなる検討が必要となる。

Figure 2.
研究2で得られた示唆



研究3において児童期トラウマと育児におけるソーシャルサポートの関連を検討した結果、まず児童期トラウマ歴のある母親は、そうでない母親よりも育児におけるソーシャルサポートが少なく、メンタルヘルスの状況が悪いことが確認された。その背景の1つとして、児童期トラウマ歴のある母親は、自分の感情を他者と共有することに価値を見出さず、他者による情緒的な支援を求めない (i. e. 対人間感情制御傾向が低い) 傾向があることが示された。他者への自己開示は、ソーシャルサポートネットワーク構築の重要な要素である。そのため自分の喜びや悲しみを他者に共有しない傾向がある人は親密な人間関係を構築しづらく、助けが必要なときに助けてくれそうな人 (ソーシャルサポート資源) を多く持つことができない。実際、「育児にソーシャルサポートを活用していない理由」を問う自由記述において、児童期トラウマ歴のある母親では「自分が困っていても助けてくれるような友人はいない」など、人間関係の悪さに起因するソーシャルサポートの資源不足について言及した人が多くいた。しかしながら「育児をするにあたり、ソーシャルサポートをもっと活用したいか」という質問項目では、児童期トラウマ歴のある母親でも大部分の人が「もっと活用したい」と回答しており、他人からの助けは要らないという考えではなく、むしろソーシャルサポート資源を獲得したいという意向があることが確認された。これらの結果を踏まえると、ソーシャルサポートネットワーク構築を促す教育的アプローチが、児童期トラウマ歴のある母親への支援方法として有効であるかもしれない。自己開示の意義やソーシャルスキルトレーニングを併せた支援を行うことは、ソーシャルサポート資源の増強に役立つと考えられ、最終的にはメンタルヘルスの改善や児童期トラウマの世代間連鎖防止につながると期待される。

Figure 3.
研究3で得られた示唆



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nakajima Miho, Hori Hiroaki, Itoh Mariko, Lin Mingming, Kawanishi Hitomi, Narita Megumi, Kim Yoshiharu	4. 巻 2
2. 論文標題 Validation of childhood trauma questionnaire-short form in Japanese clinical and nonclinical adults	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Psychiatry Research Communications	6. 最初と最後の頁 100065 ~ 100065
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.psycom.2022.100065	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nakajima Miho, Tanno Yoshihiko	4. 巻 30
2. 論文標題 Reliability and Validity of the Japanese Version of Interpersonal Regulation Questionnaire	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of Personality	6. 最初と最後の頁 134 ~ 143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2132/personality.30.3.3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中島実穂
2. 発表標題 児童期トラウマ歴とデイリーハッスルの心理的健康への影響 ソーシャル・サポートの効果，活用能力に着目した検討 -
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中島実穂・金吉晴
2. 発表標題 母親の児童期トラウマと育児、ソーシャルサポートの関連
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中島実穂・堀弘明・金吉晴
2. 発表標題 Childhood Trauma Questionnaire日本語版の信頼性と妥当性 - コミュニティサンプルを対象としたオンライン調査 -
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 亀山晶子・上田仁・中島実穂・福岡欣治
2. 発表標題 現代社会におけるソーシャル・サポート研究の現状と課題：その発展可能性に向けて
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 前田正治・松本和紀・八木淳子（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 224
3. 書名 東日本大震災とこころのケア-被災地支援10年の軌跡-（分担執筆 範囲「これからの心理・社会的被災地支援-被災者および支援者のメンタルヘルス保護に必要なこと」執筆	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------